



香港便り その32



「バレエ」レエコア」という言葉を聞いたことがあるだろうか。ファッションに敏感な方はもうご存じかもしれない。最新のファッション業界のトレンドらしく、バレエにインスパイアされたスタイルのことを指すらしい。確かにファストファッションの店に行くとバレエシューズやチュールやリボンというクラシックバレエの衣装によく見るような服が並んでいて、僕はどこか親近感を感じると同時に違和感を覚えた。

クラシックバレエにおける女性の役は大抵、お姫様、純粹無垢といったキャラクターで、「白鳥の湖」然り、「眠れる森の美女」然り、ヒロインは守られるべき弱い存在といったジェンダーステレオタイプがある。そしてクラシックバレエの衣装は大抵、白かピンク色もしくはパステルカラーで、ロマンティックチュチュといわれる長いチュールを使った衣装は女性の処女性を象徴するものでもある。バレエコアのデザイナーたちはそれを意図してデザインしているのだろうか。クラシックバレエの美的感覚をそのまま現代の洋服に落とし込むことは、川久保玲やクリストファー・メルメールなどが戦いながら築き上げてきたジェンダースレスであり、強くてかっこいい女性が着る服という系譜に反していると思う。

そもそも以前ロリータコアというトレンドが生まれて、Kポップアイドルの美的基準が世界を席巻してから久しい。バレエコアが今人気があるのは、現代社会が若さを絶対的な美として捉え、女性に歳をとることを許さないからではないか。バレエコアは多くの女性たち（特に少女時代にバレエスクールに通っていた方々）に守られていた子供時代をどこか思い出させるのかもしれない。逆説的に言えば大人になった今、経済的に余裕がなく、社会の女性に対するプレッシャーに直面し、ファンタジーの世界に戻って大人になることを拒んでいるのかもしれない。もしもバレエコアがクラシックバレエのコンテクストや今までのファッションの系譜というものを省みず、無意識的にレースやリボンを散りばめるのなら、再び女性を「ファンタジーの中に生きる少女」というフレームワークの中に閉じ込めてしまう危険性を孕んでいるのではないだろうか。僕にとつてリボンやチュールはファンタジーを象徴的に示す道具で、それらの道具がリアルの世界に降りてきたから違和感を感じたのだろう。

たちが花柄や可愛い色味を稽古着として選択しがちな中、僕と同僚たちはスポーティで強い女性という印象を与える色味ブランドを好んでいる。それは香港という土地柄、香港バレエの多様性に溢れ、先端的なレパートリー、そして何よりも経済的に自立して壮絶な競争に勝ち残っているという強さから来るものなのかもしれない。

もしバレエコアのデザイナーたちがジェンダースレス、エイジレスといったバレエそのものが向き合わなくてはならない課題に取り組みつつ、バレエの本質的な美しさをデザインに落とし込むことができるならば、バレエそのもののジェンダーステレオタイプを改善することもできるはずだ。そんな可能性もバレエコアは秘めている。

Profile

2011年にロシアの名門ワグナワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

最新トレンド「バレエコア」

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

